

神社の開帳記録を読む

1. 寺社の開帳

・開帳：寺社が普段公開しない仏像などを一定の日を限って公開し、広く人々に拝観させること。古くは平安時代から行われていたが、特に江戸時代に入ってから隆盛を極め、江戸、大坂、京都をはじめ、各地の寺社で行われた。

* 寺社側から見た開帳の目的

①収入を増やすこと

- ・「開帳差免帳」に記録されている出願理由によると、4分の3以上が寺社の修復費用を得るため。→公的にも寺社の建物の営繕を目的として企画されていたことがわかる。
- ・幕府側からしてもそれを認可することで寺社支配の一環としていた。

②新たな信者の獲得と参詣者の増加

- ・本末関係を強化し、教えを広めるための運動としても行われた。
→特に日蓮宗の開帳において顕著。(末寺の開帳で本山の貫主が説法を勤める、江戸での開帳に各地から説法の応援に来る等)

* 開帳の種類

〈開帳の場所による分類〉

- ・居開帳：自らの寺社で行う開帳。
- ・出開帳：他寺社を宿寺として行う開帳。

どちらも江戸時代に盛んに行われたが、最も盛んだったのが江戸での開帳で、承応から慶応まで(1652～1868)の間に 1565 回の開帳が行われた。地域としては、浅草を筆頭に、本所、深川方面で盛んだった。また、出開帳を行った寺社は武蔵国が最も多く、全体の2割ほどを占めた。(埼玉県域では川口善光寺、秩父三十四番札所、熊谷寺、秩父権現等が確認されている。)

* 開帳に必要な準備(出開帳の場合)

- ・各方面へ届け出を出す。(寺社奉行、本山、宿坊、藩役所等。)
→開帳そのものだけでなく、開帳を知らせる立て札を立てること、出陳する宝物についてなど細かくその都度届け出を出していた。
- ・開帳の場所を用意する。
→開帳先の建物を借りる場合もあるが、多くの場合、境内に開帳専用の仮小屋等を建てた。
- ・開帳当日は大規模な行列を作り、町を練り歩いてから開帳場に到着することが多かった。(宣伝効果も期待)

* 庶民の側から見た開帳の効果

①経済的な収入増

・その利益を得たのは開帳した寺社だが、開帳場所となった寺社の門前・境内の諸商人、見世物の興行師なども参詣者の増加による利益があった。

②文化的な面への影響

・開帳と絡む歌舞伎の上演

例) 寛政 8(1796)年の北野天満宮の開帳で菅原伝授手習鑑の上演

・黄表紙の出版→開帳寺社の縁起を通俗的に仕立てたもの、開帳を滑稽に描写したもの、開帳寺社を舞台に話を展開し、開帳仏の靈験により丸く収まる、等。

③信仰心を満たす娯楽の提供

・開帳により有名な神仏と認識され、名だたる寺社を名所として巡拝するようになった。

2. 史料について

1 北野天神社について

- ・武蔵国入間郡北野村(現所沢市)のほぼ中央に位置する神社。ものべてんじんしゃ 物部天神社、くにいちぎじんじゃ 國渭地祇神社、天満神社の三社を合殿に祀る。
- ・創立年紀不詳。口伝に基づく記録によると、人皇十二代景行天皇の御宇日本武尊が東夷征伐の際に櫛玉饒速日命、くしたまにぎはやみみこと 八千矛神やちほこのかみを祀り物部天神社、國渭地祇神社が創建され、その後、後一条天皇の勅命により京都北野の天満天神を勧進し、「坂東最第一の天満宮」となった。当初は分祀されていたが、いつの時代からか合殿に祀るようになり、建久 6(1195)年には、源頼朝が文治年間の奥州平定に靈験があったことから社殿の再営をした際に鎌倉の鶴岡八幡宮を勧進した。
- ・その後戦乱の中で廃燼に帰したが、前田利家が社殿を再興し、菅原道真公自筆の法華経、宗近の太刀、黄金 200 枚を献納、梅 1 本を献裁した。
- ・天正 19 年(1591)、徳川家康より朱印地 60 石を賜り、宮司の栗原右左衛門を、社寺を管理する神官として伊勢守に任じた。
- ・多くの社宝が伝えられ、祭神の菅原道真の生涯と死後の靈現譚を描く、室町時代初期成立とみられる「北野天神社縁起」は旧軸木 7 本とともに埼玉県指定文化財となっている。(埼玉県立歴史と民俗の博物館収蔵)

2 北野天神社文書について

中世文書 12 点、近世文書 2030 点、近代文書 133 点の 2174 点から成る文書群である。北野天神社の配下に連なる神社に関する資料が豊富。近世に全国の神社、神職を勢力下におさめた吉田家の神社の權威によらない神社の支配体系を考える上で貴重。その他近世の庶民信仰や村落における文化活動を伝える資料も含まれている。中世文書は「北野天神社中世文書」として所沢市指定文化財(有形文化財・古文書)となっている。

3. 語句

公儀：幕府。また、それにつながるもの。役所。役人。

伊勢守綱景：北野天神社神職を勤めた栗原氏の先祖。

松平対馬守：松平近禎。ちかよし 豊後府内藩 3 代藩主。

目白不動：目白不動堂。東豊山浄滝院新長谷寺(現東京都文京区関口)の中に存在したが、第二次世界大戦による戦災で廃寺となり、現在は神霊山金乗寺(東京都豊島区高田)に合併

されている。

鳥見：江戸幕府の職名の一つ。鷹匠の下役。若年寄の支配に属し、鷹場を巡視して、鷹に捕獲させる鳥の群生状態を確かめる役。

格：流儀。手段。

六尺：江戸時代に乗物をかついだ人足、駕籠かき。武家に仕える雑役奉公人をさすこともある。

挟箱：江戸時代、僧侶・公家・武士の間で用いられた衣服箱。供の者が主人の衣裳を長方形の箱に納め、ふたに棒を通してかついだ。

合羽籠：大名行列のときなどに、供の者の雨具を入れて従者にになわせた籠。ふたのある二つの籠で、前後を棒でかついだ。

沓籠：くつを入れておく籠。

旅所：祭礼のとき、本宮から渡御した神輿や神体を一時とどめておく所。

火事羽織：江戸時代の火事装束の羽織。武士のものは、くすべ皮、羅紗、科などで陣羽織のように作り、定紋をつけた。町人のものは紺のもめん組や職名を白抜きにした筒袖羽織のように仕立てた。

4. 文書の内容

- ・武蔵国天満天神社が江戸の小日向目白不動院長谷寺で出開帳を執行した時の事の顛末をまとめた記録。

- ・天満天神社の御神体は幕府に提出した書類の記載事項が知られる以外、開扉したことがなく、数年来拝観の実現を心がけていた。享保6年(1721)5月9日夜、北野村一郷に触れを出して開扉すると、御神体は小宮の板に元和7年(1621)先祖の伊勢守綱景の自筆による書付があるものが安置してあった。小宮を社殿に置き、7月10日より祭礼を行うと遠近よりおびただしい数の参詣者が訪れ、23日に御神体とそれを載せている高机まで松葉の紋様が生じるといふ奇跡が起こった。

- ・閏7月に寺社奉行松平対馬守へ報告して紋様もお目につけ、8月から江戸で開帳することを願ったが、時間もないため翌年の参詣を言い渡された。しかし、松葉紋様の変化を恐れ御神体の開帳ばかりを願っていたところ、享保7年(1722)4月1日より江戸での出開帳を許された。

- ・以下、控えや下書きをもとに北野村での開扉や周辺での見世物の様子のほか、江戸の出開帳での御神体を運ぶ行列や供の者の服装等の詳細が箇条書きされる。

〈講義の箇所後の展開〉

- ・4月24日、江戸城より御城御用として社寺宝の上覧を担当していた牧野因幡守の用人寺井三右衛門が不動院へ来て、北野天満天神の社宝である天神の御絵7幅、法華経、宗近の太刀、前田利家書状を提出するよう求め、4月28日に御城へ提出された。

- ・開帳中、社の由緒などを広めるため、不動院の前に「北野天神縁起大概」という概略を記して掲示したが、地名の記載をしておらず、栗原主殿の名前にも神主であることを示す言葉がつかないため、「山師」が商売のために手伝う開帳で、京都の北野に似せるために地名を書かないのだろうという批判もあり、風刺する和歌などの落書きまで見られた。

図版 『江戸名所図会』に描かれた北野天神、目白不動堂



北野天神
『江戸名所図会』十三
(西角井家文書No.9570)

目白不動堂
『江戸名所図会』十二
(西角井家文書No.9569)

参考文献

- ・比留間尚「江戸の開帳」、西山松之助編『江戸町人の研究 第2巻』吉川弘文館、1973年。
- ・比留間尚『江戸の開帳』吉川弘文館、1980年。
- ・所沢市史編さん委員会編『所沢市史 近世史料Ⅱ』所沢市、1983年。
- ・所沢市史編さん委員会編『所沢市史 社寺』所沢市、1984年。
- ・大館右喜「享保期江戸出開帳の一齣一武蔵国天満天神社の場合」、『所沢市史研究 第8号』1984年。
- ・埼玉県立文書館編『収蔵文書目録第54集 諸家文書目録Ⅷ』埼玉県立文書館、2015年。
- ・北野天神社 ホームページ(<https://kitanotenjin.com/>)、(2020年11月12日閲覧)